

学校だより 希望の鐘

ひとつの鐘はいつしかひびかない



八戸市立 小中野中学校

平成28年7月1日(金)

No.51

文責：校長
工藤聡

『もしも』は何度も通用しないですよ！

2次考査が終わりました。どんな気持ちでしょうか？学年の先生方に聞くと、頑張っている人がほとんどですが、全く勉強しない生徒も何人かいるようです。学校は、そのなかでも特に中学校は、知識や結果だけを追い求める所ではなく、「努力の仕方や目標に向かって頑張ること」を学ぶところだということは、これまで何度か私が言ってきたことです。そして、「失敗した時、うまくいかなかった時に、それを反省して、その反省を次につなげることも学ぶ所が学校なのです。そういったなかで、うまくいかなかった時に、「もしも〇〇していれば」とか、「あの時□□だったら」と考えることは、人間であれば誰しもあることです。

フジテレビ系（八戸市では“岩手めんこいテレビ”）で時々放送される「世にも奇妙な物語」という番組があります。タモリがストーリーテラーとなって解説する、あの番組です。私は、この「世にも奇妙な物語」を見ると、いつも『もしも』ということについて考えてしまいます。

「人生に、“もしも”は何度も通用しない」というのは、失敗ばかりを重ねてきた、ある中学校の校長を務めるサトシ・クドー氏の実際の体験にもとづく言葉だそうです。「もしもあの時こうしていたら」、あるいは「もしもあの時あんな行動をとっていなかったら」というのは、みなさんもこれまで何度か感じてきたことだと思います。しかし、そう感じるのは、すべてが終わった時です。取り返しはできない時なのです。そして、『もしも』は、自分自身が納得できなかった時に使われるのだと思いますが、そのなかでも、努力が足りなかった時に使われることが多いように私は感じるのです。

私も58年間で、何度この『もしも』を使ったことでしょうか。でも、そのほとんどが苦い思い出に結びついています。最も強烈に思い出されるのが、高校1年生の最初の数学のテストで、答案が返された時です。因数分解（インスブンカイ：中学3年生で学習する、あたえられた式や整数を、いくつかの式または数をかけあわせた形に直すこと）の問題で、200点満点のテストだったのですが、なんと0点をとってしまったのです。解答欄を間違えたとか、体調が悪くて書けなかったのではありません。正真正銘（ショウシンショウメイ：いそいつわりのないこと。ほんもの）の0点です。テストを受けた直後は、できはよくなかっただろうとは思っていたのですが、まさか0点とは思わなかったもので、答案を返された時は、目の前が真っ暗になり、続いて頭の中が真っ白になったことをおぼえています。さらに、父親がものすごく怒っている姿や母親が泣いている姿、クラスメイトが私を指さして笑っている姿が脳裏（ノウリ：頭の中）を横切りました。友達が私を指さして笑うとか、母が泣きくずれるとか、そんなことはもちろん考え過ぎなのですが、その時は本当にそう思ったのです。この時ほど、『もしも』と思ったことはありませんでした。0点をとったこれ以後は、私は数学だけでなく、勉強全般に対する自信を失い、大学受験には3年（大学は通算で22）失敗し、先生になるための試験に合格するのにも、7年かかることになる（小中野中学校の先生は、たいてい1年か2年で合格しています）のです。もちろん、そのたびごとに『もしも』と思ったことは言うまでもありません。

みなさんは、これから60年も70年も生きていきます。できるだけ『もしも』と思うことがないような生活をしてほしいと思います。少しでも後悔しない人生をおくってほしいと思います。昨日の2次考査で、『もしも』と思うことが少しでもあったら、それを次に生かしてほしいと思います。人生の先輩として、そして『もしも』のスペシャリスト・達人として、みなさんをお願いしたいと思います。（7月1日の全校朝会での講話を編集しました。）